的性格であることは、畢竟弥陀とわれらとの媒介的働きとして仰がれるのであって、それはわれらの信を出生せしめんがためにほかならない。従ってわれらにとって諸仏はどこまでも法（本願）を体とする教の位であり、それはわれらの行信として満足する。故に諸仏は何であるかの詮索よりも、何れに見出すかがより本質的でなければならない。そこに諸仏は弥陀の応化身としてわれらの行信の上に感佩せられる無限の伝統養育であり、それなればこそ諸仏をまって真に弥陀が成就する意味も明らかである。かくて諸仏の概念も「諸仏世尊」の語の如く、弥陀の応化身、衆生の導師として世尊というが最も適切でなかろうか。

教行信証に於ける転釈について

稲　葉　秀　賢

凡そ宗祖ほど、言葉に対して、鋭敏な感覚を抱いていた人は少いように思われる。そしてその鋭敏な感覚が二の態であらわされている。一は、言葉の厳密な規定によって、その体験内容と鮮かに表出することである。その顕著な例を挙げるならば、便同弥勒と興如来等に於ける等と同の概念の区別である。便同弥勒も興如来等も、正定聚の位をあらわすことによって、信心の得益を示すのであるが、この場合宗祖は弥勒に対しては同と云い、殆んど等と云われることはない。又如来に対しては等と云って、同と云われることは決してない。等と同とは、ともすれば概念的に混乱され易いけれども、厳密には全く異る概念である。形式論理で云えば、同は同一律で、「AはAに同じ」という形であらわされる。従って弥勒の場合には同でなければならぬ。何故なら、弥勒は等覚の菩薩であるから、信心の得益が等正覚であることを明かにする為に、弥勒に同じと云われたのである。之に対し、等という概念は「AはBに等しい」或は「AはCに等しい」等の如く、二の別なAとB或はCとが等しいという綜合判断である。従って、信心の人は一面に「いかり、はらだち、そねみ、ねたむこころ」の止まぬ凡夫であるから、如何にしても如来と同じであることはできない。けれども本願を信ずる一念に無量造悪の凡夫が如来と等しい身となるのである。それが信心の得益なのである。こうして、弥勒の場合に、同、如来に対しては等という言葉の厳密な区別を通して、宗祖の信仰体験の深い彫りが鮮かに表出されてくるのである。

二には言葉の自由な駆使に依て、その豊かな体験内容を表す態である。即ちこの形式に属するものとして字訓釈と転縁という形式が注意せられる。

凡そ言葉は限定するはたらきを持つものである。例えば、「嬉しい」という表現は、嬉しいという言葉に依て、その体験内容を表現しているが、そこにその体験内容が悲しいのでもなければ、淋しいのでもないという限定をするのである。凡ゆる物の名も言葉に依る表現であるから、机という場合には、それが机以外の何物でもないという限定をするのである。ここに言葉が固定化する。従て言葉は

魔術として自由な表現を持つけれども、又言葉の限定するはたらきの故に表現の不自由が起るのである。殊に宗教体験の内容といったものは、言葉の限定に依て却てその内実を見失わしめる。禅家に於いて以心伝心というようなことが云われるのも、宗教的体験の師資相承が言葉に依て限定せられない深い内密であることを物語るものである。しかも、われわれは言葉に依らなければ何物も表現することができない。それ故にその言葉を自由に駆使することに依て、固定化する概念を打破しようとするのである。こうした形式に就いて宗祖にあらわれた二つの解釈が注意せられる。一は字訓釈と云われるもので、その最も顕著な例は「信巻」三一問答の前番の問答にあらわれた字訓釈である。即ち至心に就いて、至に三訓、心に二訓を出し、又言楽に就いては、信に十二訓、楽に八訓を出し、更に欲生に就いては欲に四訓、生に四訓を出し、しかもこれらの字訓は或は本訓、義訓、転訓、同音訓、同字訓などを自由に駆使して、その豊かな体験内容を明かにせられるのである。これは全く言葉、文字に対する鋭敏な感覚なしにはできないことである。

二には所謂転釈と云われる形式であって、一の文字に依る表現が、その内容を限定し、それにもりきれないものがある為に、その固定概念を排して転釈し、いくつかの言葉の概念を即で結びつつ、転釈するのである。そしてそれに依て豊かな体験内容を表現せられるのである。『教行信証』にあっては、真実の行、信、証に於いて、それぞれ転釈が試みられているのである。「行巻」には称名の転釈と行一念の転釈、「信巻」では信一念の転釈、「証巻」では滅度の転釈があり、それぞれに真実の行、信、証の体験的内容が示されているのである。然もその転釈にあらわされる用語は、これを転釈の上に求め、以てその転釈が自己の独断に終らぬ配慮がなされているのみならず、そこに教伝の伝承が歴史的に跡ずけられるような態で行われているのである。いまその一々に就いて、内容的にそれを解釈することはできないけれども、かくの如き宗祖の解釈の方法が宗祖の鋭い宗教的感覚を示す切尖になっていたことを忘れてはならない。

文明古写本（御本書）の意義

日野　環

（発表要旨は原稿未提出のため掲載に至りませんでした）